

地域と様々な形でつながる

横浜市緑区霧が丘4丁目17-3

NPO法人ふかふか

理事長 高崎 明

1. はじめに

NPO法人ふかふかは、様々な形で地域とつながっています。知的障がいの人たちの働くお店（パン屋、お惣菜屋、食堂、アートスタジオ）は、街の中で「ふかふかさんが好き！」（「ふかふかさん」とはふかふかで働く障がいのある人たちのこと）というたくさんの方ファンを作り出しました。ふかふかさんと地域の人たちが一緒になって芝居作りやパン教室をやっています。大学に出かけ、授業の中でふかふかさんと学生さんが様々な形でおつきあひする場面を作っています。区役所で人権研修会をふかふかさんといっしょにやっています。企業を対象にした研修会をやったり、企業にアートを提供しています。

2. 取り組みの紹介

2-1 地域を耕し、豊かにする

ふかふかさんたちは、自分を押し殺して社会に合わせるのではなく、そのままの自分で働いています。そのままの彼らの魅力（ほっこりあたたかな雰囲気）に気がついたたくさんの人たちが、彼らのファンになりました。障がいのある人たちと地域のたくさんの人たちがいい出会いをする、という形でふかふかは地域を耕し、豊かにしてきました。ふかふかにあっては、障がいのある人たちは、支援の対象ではなく、地域を耕し、豊かにする、というすばらしい働きをしています。

2-2 演劇ワークショップ-社会を豊かにし、一緒に生きる理由を芝居で表現

ふかふかさんたちと地域の人たちでいっしょに芝居作りをしています。月一回集まり、6ヶ月かけて芝居を作ります。できあがった芝居は大きなホール（300人収容）の舞台上で発表します。演劇ワークショップの場の楽しさを中心になって支えているのはふかふかさんたちです。ですからいっしょにやっていると、ふかふかさん（障がいのある人）に向かって「あなたにいてほしい」「あなたが必要」と自然に思えてきます。そういう関係で芝居を作っていくと、できあがった芝居も、彼らといっしょに生きていった方がいい理由を無理なく表現できます。ふかふかさんたちはいろんなところで私たちとは発想が違うので、できあがってくる芝居の幅が健常者だけで作るときよりもはるかに幅の広いものができます。ですから、彼らといっしょにつくる芝居は、幅の広い分、社会を豊かにします。

2-3 大学を耕し、豊かにする

大学の講義の中でふかぶかさんと一緒に「すごろくワークショップ」「演劇ワークショップ」を行ったり、ふかぶかさんとの出会いを「詩のワークショップ」の形で表現したりします。単なる交流ではなく、一緒に新しいものを創り出す関係を作っています。詩を元にした長さ7~8 冊の絵巻物をいっしょにつくった大学もあります（東洋英和女学院大学、桜美林大学、創英大学、早稲田大学）。立教大学では「哲学対話」をやりました。

2-4 区役所で人権研修会

区役所の人権研修会で、ふかぶかさんが講師として出かけてお話ししたり、「すごろくワークショップ」をやったりして、本物の、中身のある人権研修会をやっています（青葉区役所、緑区役所、保土ヶ谷区役所、瀬谷区役所）。人権問題の当事者の話を聞き、彼らと直接おつきあいすることこそ本物の人権研修です。

2-5 企業と連携

「ふかぶかしんぶん」に載せた「生産性のない人が社会に必要な理由」の記事が、印刷業界の全国紙に取り上げられ（印刷業界も障害者雇用には発想の転換が必要と考えている）、それがきっかけで全国から印刷会社の社長さん十数名がふかぶかで研修を行いました。業界紙にふかぶかさんの絵を取り入れたところもあります。いろいろおつきあいのある太陽住建はニューヨークで行われたSDGs(持続可能な開発目標)の集まりで発表したレポートの表紙にふかぶかさんの描いた絵を使い、ふかぶかのメッセージを世界中に伝えてくれました。

3. 考察

ふかぶかは「障がいのある人たちとは一緒に生きていった方がいい」を法人の理念にしています。「障がいのある人たちと一緒に生きていく」というフラットな関係が、今までにない新しい価値を生み出しました。彼らは、あれができないこれができない、ではなく、「社会を耕し、社会を豊かにする存在である」という新しい価値です。それが地域との様々な豊かなつながりを作ってくれたと思っています。

4. おわりに

「支援」という上から目線で障がいのある人たちを見るのではなく、「一緒に生きていく」というフラットな関係を作ると、まわりの社会がどんどん豊かになっていく、という実例を示すことができたと思っています。